

第2回未来学フォーラム

第4分科会

(注)一部聞き取り不能の部分に*****とした箇所があります。また、発言者の意図と違った解釈により文章化した可能性もあります。ご了承下さい。

「信頼資本を軸にした持続可能社会構築の試み」

鍋木 孝昭氏 (HOSP!事務局長) 新日本未来学会理事

鍋木 鍋木でございます。今回私がお話しするのは、かなり思い切ったことです。しかしながら、実際これはもう既に始まっていることです。現実としてです。それをお話しします。表題の「信頼資本」、信頼資本とは何ぞや? という話はおいしいたしますけれども、その信頼資本を軸にして社会を形づくっていくことを目指しています。いま、一言で言えば、「世の中は金だね」と思っているのが世の中のほとんどで、実際世の中もそう動いているということがほとんどですけれども、社会の血液として働くものを金だけではなく、我々が信頼資本と呼ぶ知恵であるとか思いやりであるとか、できればみんなと一緒に仲良く暮らしたいという気持ちであるとか、そういうものをお金と一緒に回せる社会をつくりたいと思っています。それで、そのようなことをするには、一緒に回せる事業をちゃんとつくりたいといけないと思っています。そういう事業づくりはもう始まっています。こういうお話をさせていただきたいと思っています。

我々のグループはHOSP!といいまして、一応英語でも略語として当てはまるものは作ってあるのですが、もともとは日本語で、本気になると大人もすごいぞ!の略です。「大人のやることを見てろ、おまえら」という、非常に大胆なというか、生意気なことをやっております。メンバーとしては、先ほど第1分科会でお話した曾根原さんであるとか、アマタの熊野社長であるとか、コミュニティネットワーク協会の皆さんであるとか、社会的なことと経済、環境をマッチさせる事業をやってこられた方が多く入っているグループでございます。

今、100年に1度の経済危機とか言っております、新たなビジョンが必要ですねというような能書きが書いてあるのですが、時間がないのでパスします。

ここが一つのポイントです。今、お金第一ということで、信頼関係とかいろいろなもの

が失われているねという中で、「市場」が悪者になっていますが、我々の時代認識として、実は市場経済とか民主主義というのは、人類が生み出したものの中で非常にすぐれたシステムだと思っております、これには大きな問題はないと思っております。問題があるのは、やはり資本主義のほうでしょう。よく言われることですが、実体経済のおおむね3倍から4倍のマナーが世界を動いていると言われていています。そういう状態を生み出している資本主義の問題。この資本主義というのは、実は人間についてかなり狭い見方をとっています。人間は最大の利益を追求する一次元的な存在であるというよう見方です。そこから資本主義のしくみは積み上がっているのですけれども、実は我々にはもう少し自然な願望があります。もっと周囲の環境をよくしたいとか、仲間と一緒に暮らしたいとか、仲間の生活もよくしたいとか、そういうようなものを基本にして社会をつくり直していくことができれば、と思っています。

もっと言えば、みんなそう思っているんですよね。みんなそう思っているんだけど、それで社会が動いていないのは、やはりそこに事業とか経済の力がないからだと思っております、そういう思いとお金というものが一緒に回る仕組みを作らないといけない。さっきエンデの話ができましたけれども、エンデが注目した地域通貨も、経済は大事と思っておりますが、思いや願望は地域通貨となって、実際の現金とはわかれて流れるのですね。そういう取り組みは結構あるんですけれども、我々は一緒に流したいと思っています。そのような試みが幾つか始まっておりますので、その紹介をしたいと思っております。

我々のその自然な願望とかが発揮されるときには、関係性がよくなって豊かになるというふうに思っております、こういうもの、自然な願望、それから豊かな関係性、それから自然資産を活用した知恵、そういうものをひっくるめて、言葉がまだ本当にいいかどうかかわかっていないのですが、「信頼資本」と呼んでいます。それが流通し、蓄積・活用できる社会の実現を目指しています。つい最近、仲間が財団をつくりました。信頼資本財団というものです。これはお金を貸して事業をするんですけれども、利子は最低限にして、最低限の利子のほかは、知恵とか現物、例えば農業の場合、地域の農産物で返してもらおうかと考えています。そのような信頼資本にまつわるもので配当してもらったり、利子を返してもらおうという、そういうような財団も最近立ち上がりました。

そのために我々の仲間は、荒れた資本、森林とかそういうような自然資産とか、なかなか仲間うちの感動意識とかという資本主義社会で切って捨てられているものに価値を創出することをやっています。価値を創出するということはどういうことかということ、それは

売れるものになる。ちゃんと皆さんがお金を払って買ってもらうものにするということです。そういうものを地域でどんどんつくっていく。しかも、その地域からどんどん売っていく。そうすると地域に経済力がついて、地域が何か買うときにも、例えばエネルギーを外から買うときにも、グリーンなエネルギーを買うんだということが出来ます。そういうような、自分で事業をやって、かつ、買うときにも持続可能な様式で買っていくということが出来る地域ができることによって、世の中全体が変わっていくというようなストーリーをすごく大ざっぱに描いています。

この写真ですが、これは牧場なんですね。これ、森林の牧場という事業を知っている方いらっしゃいますかね。いますね。やっぱりね。数人いらっしゃいますね。これは、日本の森林というのはすごく荒れていますけれども、ここに1ヘクタールに1頭ぐらい、ジャージー種の牛を放つなんですね。そうすると、下草刈りをかなりしてくれる状態になります。ふん尿は1ヘクタールに1頭か2頭だと完全に自然循環になります。牛乳、もちろんおいしいです。当然、変な飼料は全然食べていませんから。この辺の草を食べるので、とてもおいしい牛乳が出ますね。

それがこの商品です。これはアマタさんの製品で、500ミリリットル630円ですね。500ミリリットルというと、普通100円くらいですね。それが630円もするのですけれども、これが京都の伊勢丹ですと完売が続いています。もう12時ごろなくなるという状態になっているんですね。実はこの630円という価格の中に我々の気持ちであるとか感動がつまっていると思うのです。一度森林の牧場に行って、牛乳をぐっと飲む。うまいんですね。そういう感動があると、週に1回ぐらいはこれ飲みたいと思うわけですね。そういうようなものの積み重ねで経済をつくっていく。これはまだ特異な例で、これがすぐに世の中を席卷するとは思っていないですけれども、こういうタイプのものをたくさん事業として積み上げていくというのがこれからの方向だろうというふうに思っています。

もう一つの例としては、仲間のコミュニティネットワーク協会がやっている仕事ですが、例えば老人ホームを再生するとすると、建築物も再生するんですけども、それと同時に、コミュニティも再生します。地域のお年寄りの元気な方には、元気でなくなってしまった方の面倒を見てもらうというような相互扶助であるとか、地域のデイサービス事業もいっしょにやるとか、そのような工夫をして、地域の中で事業をちゃんとつくっていくことが全体を変えることにつながります。いろいろな工夫、それはもともとは我々の気持ちであったり、感動です。そういうものをうまく生かす事業をつくる。

これがなかなかうまくいかない理由が一つあります。我々が他人のために何かしてあげたいとか世の中をよくしたいという気持ちは、やはり弱いものなんですね。弱い気持ちをつなぎとめるためにはやはり事業のセンスが必要で、魅力的なものをいっぱい出していく必要がある。一生懸命まじめやるだけでは、なかなか世の中よくなりません。

事業としての森林の牛乳について言えば、昨年、伊勢丹でお中元だと第3位でした。1位、2位はビールですから、ほとんど1位だと思っています。それだけの売力のある商品なのです。事業にちゃんと気持ちや感動を組み込むというノウハウ、これに尽きると思っています。それがきちっとできていけば、たくさんできていけば、やがてそれが社会をよい方向に回していく力になるとに思っています。

今言った森林の牧場の第1号が京丹後にあります。そこにはバイオガスプラントがありまして、その副産物の液肥を畑に戻すなどの自給の地域循環を試みています。こんな感じですね。地域の旅館から生ごみがバイオガスプラントにきて、液肥を田畑に戻し、それで米がつくれ、草に関してはまた森林酪農に戻していくという、循環です。ストローベイル・ハウスという稲の茎のところを使った建築とかそういうものも、まだまだ事業にのっていませんが、やっています。

森林酪農だけに限って言えば、森と人と牛との共生がこういう関係で出てきます。地域にあるものというのは必ず価値がありますので、地域にあるものをよく見つめた上で、このように相互の関係と相互の頼り合いというか、関係性をちゃんとつくっていくということが大原則だと思っています。

イメージは、さっきのように、牛舎があり、森林の牧場があり、学びの場があり、自然環境保全型農業があって、生ごみを回収するしエネルギーを供給するという、地域でできるだけ自給をするというような姿というのが、そんなに遠くなくできるのではないかとこのように思っております。

我々HOSP!の特徴は、そういうことをやっていく仲間がすでにいる、先ほど申し上げた森林の牧場はアマタという会社がやっています。アマタは環境関係をちょっとかじった人はみんな知っている会社だと思いますけれども、そのアマタであるとか、今申し上げたCN協会であるとか、第1分科会で話をした曾根原さんとか、実践としている仲間がすでに多くいることです。曾根原さんのモデルは例えば、第1分科会を聞いた人はごめんなさい。荒れた地があると東京の丸の内の三菱の社員の皆さんに来てもらって、CSRの活動として開墾をしてもらって、その作物を東京に返して、三菱関係のレストランや三菱地

所が開発をしたマンションで売るとか、そんなようなおもしろい循環をやろうとしています。そういうのは幾らでもやろうと思ったらあるんですね。

森林の牧場の第2号は那須にあります。そこに70世帯の介護型プラス自立型の施設をつくれます。高齢者の方にもちょっと仕事をしていただけるようにする予定です。具体的に言うと雑穀をつくってもらったり、ということです。雑穀をつくと雑穀の茎がでるので、それは冬の間は草がない森林の牧場にもっていき、冬の間、牛に食べさせます。雑穀の実はもちろん食べるですが、地域で食べるだけではなくてスイーツをつくっています。スイーツをつくって販売しよう。そういうようなことをやっております。そのような地域が幾つかできてきている。そのようなことをどんどん広げたいというのが、我々HOSP!の活動です。

那須の話では、森林酪農が中核にありますがそれだけではありません。レストランを作ろうとしています。そこではもちろん地元で栽培したのを使います。その栽培は高齢者の方のちょっと仕事、生きがいになるといいと思っています。大豆にも取り組んでいます。大豆への取り組みは重要です。日本の伝統的なものだけど、今、見捨てられかかっているものをちゃんと一回作りあげていこうという考えがここに 있습니다。森林酪農の副産物としてはきのことかもあるし、当然、くつろぎとか研修の場というものもある。こういうような全体図を各地域でつくっていくということが、豊かな未来をつくる一歩かなと。基本的にはやはり地域でこういうものができて、それによって全体が引っ張られていく。自然資本が豊かな田舎の方で作っていくことが多いでしょう。田舎の方でこういうものが幾つもできて、都会からある程度の人口移動があって、都会の姿というのがもっとよく、こうしたらいい、ああしたらいいというのが見えてくるのではないかというふうに漠然と思っています。

我々の組織は、基本的にそういった信頼資本というものに対してコミットした方々と、この真中にいる方々ですね。それとあと、そこまで言わないけど、何となくこの活動おもしろそうだから、ちょっと情報もらおうかなという方々、こういう二重構造の組織を持っていて、私はこの真ん中の方のコアの部分の事務局長という役割で活動を続けております。

活動領域としてはいろいろあります。CN協会さんは「百年のコミュニティをつくらう」というスローガンを掲げていますが、そういうスローガンをつくったり、世代間交流、ヘルスケア、統合医療、循環型エネルギーなどです。さっきの雑穀なんかは体にいいんです。あまり統合医療という言葉は使いたくないです。生活支援とか総合文化何とか支援みたい

な言葉をできれば使いたいのです。医療という言葉はなるべく使いたくないんですね。予防医学の範疇ではあるんですが。

活動としては、仲間集めをしたり、きょうももし仲間になっていただけると大変うれしいんですけれども。それぞれの地域がありますから、そこにいろいろな人を連れて行く。我々も地域に行って刺激を受けるし、できれば若者をいっぱい連れて行きたい。若者をいっぱい連れて行っていろいろなことを感じてもらいたいです。少し先になりますけれども、そういう仲間が集まってくれば、我々だけでできないところ、どうしても制度を変えなければいけないところというのは必ず出てきますから、集まった人や地域の「場チカラ」を使って政策変更をやっていくとか、そんなような活動をしようかなと。当面は旅行をするかなと思っています。ちゃんと持続可能な社会を本気で目指している地域を訪問して、そこで相互啓発で一緒に学び合おう、学びの場をつくらうということが、我々HOSP!の当面やることかなと思っています。

そういうわけで、ちょっと雑駁ですけども、ポイントはそういう信頼資本というものの社会を組み上げることが大きなブレークスルーになる可能性があるねということと、もう一つは、それが既に始まっている。本気になっているやつらも結構いるぞ、ということでした。お仲間になってくださる方がいると大変うれしく存じます。どうもありがとうございました。(拍手)

司会(松本) どうもありがとうございました。では、何か御質問、御提案あればどうぞ。

先ほどの幾つかのお話の中で、(以下、聞き取り不能)。その場合に、国の赤字が*****そのうち約6割ぐらいが高齢者の*****。その1,000兆円がうまくこういうところに流れていく。これが社会に*****。そういった観点で(聞き取り不能)。

鏑木 まさにおっしゃるとおりの問題意識を持っておりますが、ちょっとまだ現在、どういうふうにもっていかうかというのはなかなかまだ決めきれていないという感じです。確かに、お金ってあるんですよ。世の中にですね。あるので、どう持ってくるかなというのはいろいろ工夫しなければいけないのですが、まだちょっとそこまではアイデアが出ていないので、何かありましたらぜひ御教授いただければと思います。

恐らく一つはやはり、高齢化問題。介護(聞き取り不能)。しかし、不安だからみんな(聞き取り不能)。もっと幸せな老後が送れるとなれば、*****。東京

のエネルギー自給率、食糧自給率1%ですから、もし*****食糧が輸入が潤沢にならなくなれば、結局、東京から地方に行かざるを得なくなる。そのときに、まさしく森林*****。地方でちゃんと生活できるコミュニティをどれだけ形成できるか*****。そうしたら、都会で高層マンションがエレベーター使えなくなったりしたら、やはり*****。そうしたら、結局地方に出ていかざるを得ないわけです。そうしたことで、うまく先回りして誘導していく上手な仕掛けがあればいいのではないかと考えています。

鍋木 全くそのとおりですね。最初の方の質問というのは具体的な話なので実際あるんですけども、例えば那須だと、月に10万ちょっとあればとても豊かな暮らしができるんだそうです。それはこういう暮らしですということを見せています。だから、保険だけでも大体大丈夫だよというようなことを具体的に見せているので、そこを信頼いただければ、小金を一生懸命ためなくても済むかもしれません。

後者の方はおっしゃるとおりで、一緒に考えています。うまくこの考えを伝えて、地方の方でもっと今のウエーブを、今、仲間の地域と可能性ありそうな地域で10個あるかないかという感じなんですけど、これが100個になったり150になったりというところまでなるべく早くもっていきなというふうに思っています。

*****の*****と申します。*****ですが、最初の質問で出た*****コミュニティネットワーク*****。恐らく、ビジネスの側としては*****ということ*****。あるいは、高齢者が自分のお金を積み立ててというのがありますが、それ以外に、例えば山林とかそういうものを子供にあげないという時代なんですけれども、(以下、聞き取り不能)

司会(松本) これは、幾つかの地域でモデル事業的なことをやっているんですか。

鍋木 実際には、一番それに総合的に取り組んでいるのがアマタさんです。アマタさんは今、那須と北杜と京丹後の三つで、できるだけ全体的に見えるように、全生活に見えるようなモデルをできるだけつくろうと思っています。それでも、例えば那須等はエネルギー全くやっていないとか、交通は全部まだ全く未着手だとか、それはあるんですよ。あるんですけども、なるべく全体的に見えるような地域にしたいという強い意思を持ってやっています。

司会(松本) ほかに何か御質問、御意見ございますか。

このイメージとか理念自体も非常に感じがいいというか、こういうのができると

いいなと思うんですが、ただ、こういうのが広がっていったときに、例えば日本全体、地球全体とまでは言わなくても、日本全体でこういったような考え方が広まっていったとしたら、一体どんな世の中になるでしょうね。多分、人口的に言うと今の10分の1とか20分の1なので、都市はなくなって、比較的孤立したコミュニティがちらほらとあると。

鍋木 江戸が3,000万でしたっけ。江戸時代が3,000万ですから、3,000万は楽に食えると思っていますが、1億食えるかどうかはちょっと何とも言えない。今現在は何とも言えないというのが実態だと思います。ただ、第1セッションで曾根原さんも言っていましたけれども、日本の森林比率はフィンランドに次いで世界第2位で地上資源はすごくある国なので。これは釈迦に説法ですけれども。地下資源はないけど、地上資源のある国としては、日本は世界有数の国ですから、日本にできなければどこにもできないという話になりますので、やっていくんだろうなと。さっき申し上げたように、終点はやはり見えていないんですよ。そこはぜひ、未来学会で研究をしたいなと思っているところでございますけれども、終点は見え切っていないというのは本音です。

縄文時代の人口密度とかね。非常に豊かな暮らしを縄文時代の人たちはしていたと思う。

鍋木 江戸ぐらいでも楽勝だと思いますけどね。3,000万ぐらい。

司会（松本） こういう一種の理想社会というのは、やはりサイズがあると思うんですよ。だから、その辺は将来検討しなければいけないと思います。ほかに何かございますか。では、ありがとうございました。（拍手）

引き続きまして上田昌文さんに、「市民参加型の技術未来予測作業はいかにして可能か」というちょっとかたい表題になっていますが、今まで二つの話とちょっと違って、若干方法論的な話になりますね。では、ひとつよろしくをお願いします。

（了）